命長直五郎（命長一男祖父）

（話者　吉田庄一・吉田一郎）

勢至堂の大水

《勢至堂》

明治二十九年は雨の多い年で、入梅後も、大雨が降り続いていた。沢からは泥水が流れ出て、あっちこっちに山崩れが起きた。勢至様の裏山が崩れ、御堂が流されて濁流に呑まれた。この時、扉だけは流されなかったので、のちに御堂を再建した時、そのまゝ使った。現在の扉がそれである。

村の南より流れているどうねん沢も大水が出た。沢の奥が、雨のために崩れて水をせき止めていたのが、一時に抜けて、大きな杉の木が流れて来て、私の家の東の渡辺権次郎一家が流された。権次郎爺様はかろうじて助かったが、妻の「おふみ」どんは、娘と一緒に濁流に呑まれて、行方不明になった。長沼近くまで流されて、死体となって見つかったという。この人は会津月形村より嫁に来た人である。

県から被害状況調査に来た役人に、権次郎爺様は「さっかけ　さっかけ」とくり返して説明した。県の役人は、『早駆』で良いのではないか」といった。すると爺は、「そうだ　そうだ」といった。被害状況を早駆で、つまり大至急で報告して呉れとのことだった。

無学な權次郎爺様なのに、字を知っている役人に字を教えたと、今に語り伝えられている。

（話者　柏木平蔵）